

トマト葉かび病（病原菌：*Fulvia fulva* (Cooke) Ciferri)

○ 被害と発生生態

本病は糸状菌による病害であり、感染すると葉の表面に不鮮明な淡黄色の小斑点を生じ、葉裏に灰黄色～緑褐色のビロード状のかびを密生する。病斑が拡大すると、菌そうも灰褐色から灰紫色に変わる。一般に下葉から発生し、次第に上葉にまん延する。病勢がすすむと葉は枯死する。

病原菌は、被害植物の残さで越冬し、翌年の伝染源となる。ハウス等の施設栽培では、病原菌は各種資材に付着して越冬し、伝染源となる。また、病斑上に形成された分生子が発芽して気孔から侵入し、二次伝染する。気温20～25℃、多湿条件下での発生が多く、特に施設栽培での被害が多い。

○ 防除方法

(ア) 耕種・物理的防除

- ・消毒済みの種子を使用する。
- ・「CF 桃太郎はるか、CF 桃太郎ヨーク、桃太郎サニー、桃太郎ギフト、桃太郎コルト」「麗夏、麗容、りんか409」などの抵抗性品種を栽培する。
- ・多湿条件下で発生しやすいので、換気に努める。
- ・肥切れや、着果負担による草勢低下は発病を助長するので適切な肥培管理を行う。

(イ) 薬剤防除

- ・感染から発病までの期間は2～3週間と長いですが、まん延後は防除が困難なので、初期防除を徹底する。
- ・葉裏にも薬液が十分にかかるように丁寧に散布する。
- ・薬剤の感受性低下を防ぐため、同一成分及び同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。



葉かび病の病徴（左：葉表、右：葉裏）

葉かび病菌の分生子